

みんなが住みたい町に

熊本地震によって甚大な被害を受けた益城町。子育て支援のために「つどいの広場とん」とん」を運営していた木村さんの自宅も被害を受けました。活動拠点としていた施設は、敷地が災害ゴミ置き場となり立入禁止。一時は活動中止を余儀なくされましたが、木村さんの熱意が周囲を動かし、震災から1か月半後には新たな拠点をみつけ子育て支援を再開。新たに仮設団地巡回事業にも取り組むなど、震災後の益城町で様々な年代の方の支援に尽力されている木村さんにお話を伺いました。



NPO法人 子育て応援おきな木 理事長
木村 由美子 さん

子育て交流の場を益城町に

私は、保育士の経験を活かして地域の主任児童委員を担っていました。その頃、益城町に子育てをする人や子どものためのつどいの広場がなかったため、仲間の主任児童委員とともに0〜3歳までの子どもがいる人との交流の場として子育てサロンを開き、子どもたちが遊んだり、親同士が悩みを相談したり、子育ての知恵や情報を分かち合う場としての活動をしていました。

被災した子どもたちの居場所を

熊本地震で我が家が損壊し、近所に自主避難しました。車中泊をしながら、そこに集まった30人ほどの方へ炊き出しをしていましたが、道が通れるようになったとき、「何かやらなきゃいけない、とどまっていたらいけない」という思いに突き動かされ、町の災害ボランティアセンターとして多数来ていただきました。

震災後のストレスを抱える子どもの中にはルールを守れず荒れている子もいましたが、県外からの応援も含めて数人の臨床心理士に来ていただき、子どもの心のケアにも取り組みました。プログラムが終了する頃には、荒れていた子どもたちが落ち着きを取り戻し、ルールを守ってくれるようになりました。

大人たちも支えたい

平成28年10月からは、益城町の地域支え合い事業を一部受託し、毎月、町内16か所の仮設団地の集会所を巡回する活動も始めました。子どもたちのケアや子育て支援が当初の目的でしたが、実際に回ってみると日中は子どもの姿は少なく、大人の方が多かったことで、急ぎよ大人でも楽しめるものを準備したり、血圧計を購入するなど、手探りからのスタートでした。どのようなことをしたら受け入れていただけられるか試行錯誤でしたが、看護師や保育士などの専門職やボランティアの方にもご協力いただき、みなさんでお話しをしたり、季節に合わせた小物づくりをすることで震災のことを忘れる時間を過ごしていただいたりしています。参加者の方々から、「ここに来るのが楽しみ」と言っていたり、団地を出て行かれた後も参加してくださるなど、今なお人の輪が広がっていることを有難く感じています。



▲ わいわいタイム(おはなし会)

ンティアセンターの業務を手伝い、合間を縫って益城町総合体育館の避難所運営を担う団体とこれからの支援活動について話し合いを重ねました。

児童館や図書館など公的施設は避難所となり、公園も危険な状態で、大人たちは避難所から家の片付けに通う日々の中、学校が休みの日に子どもたちが過ごせる場所がどこにもありませんでした。そこで、子どもたちに楽しく遊べる居場所と時間を提供し、その間に保護者の方が安心して生活再建に専念してもらうサポートをするため、益城町総合体育館の一角で、平成28年6月から8月まで毎週末に「子どもの遊び場プログラム」を実施し、体遊びや花の寄せ植えな

みんなが安心して過ごせる益城町に

「つどいの広場とん」とん」があった場所は、地震後すぐに震災ゴミ置き場となり、活動できなくなりましたが、1か月半後にやっと益城町総合体育館の一角に拠点を建て、活動を再開しました。現在は上益城農業協同組合益城総合支所2階に移り、震災前と同じように、小さいお子さんとご家族がほっとできる場所となるよう、スタッフとともに活動しています。

震災を経験し、これまで知り得なかった沢山の方との出会いやつながりができました。みんな、「何かをしたい」「何とかしないとけない」という思いがあり、私たちの活動はその思いに支えられて進んできました。

今後、私は新しい活動もしたいと思っています。例えば、県外から転入されてきた妊婦の方は近くに頼れる人も少なく孤立しがちです。産後うつ予防のためにも産前産後の家事支援を行っていただけたらと考えています。また、放課後の子どもたちの居場所をつくり、親も子ども安心して過ごせるような支援をしたいです。震災を通してつながってくださった方たちと意思を持ち寄り、できることから始め、みんながこれからも住みたいと思ってもらえる益城町にしていきたいです。



▲ スタッフとともに



▲ えいごDE親子遊び